中國文學報　第七十三冊

元代江南における詞樂の傳承

中原健二
佛教大學

はじめに

一二三四年、モンゴルは金を滅ぼして北中國を支配すると、一二七一年には國號を元と改め、その八年後には南宋を滅亡に追いやって中國全土を支配下に置いた。この間の文學史上の事象としては、金末元初に北中國において新しい歌曲である北曲が誕生し、隆盛を見たことが第一に擧げられる。一方、南宋支配下の江南においては、歌曲の主流は唐五代以來の傳統を受け繼いだ詞であった。元朝が江南を支配下に置くと、詞は北曲に壓倒されてその曲（メロディー）の傳承を斷ったとこれまで考えられてきた。近年においても、たとえば丁放氏の「論詞樂亡于元初及其原因」[1]はそうした認識に基づく。しかし、南宋滅亡からわずか三、四十年で詞樂が北曲に壓倒されて傳承を絶ったとは、常識的には考えにくい。『詞源』の著者で樂曲に精通した詞人の張炎が卒したのは、元の延祐七年（一三二〇）ごろであって、彼と同樣に南宋末に生を享けた士人や妓女たちによって、十四世紀初頭まで詞樂は確實に傳えられていたと考えられる。このことは實はすでに萩原正樹氏が資料を擧げて論じられている。本稿は萩原氏の論を承け、十四世紀の間、江南では詞樂のかなりの部分が傳えられていたと見るべきことを論じる。[2]それは同時に、元朝支配下の江南の文化狀況を考えるための資料を提供することにもなるだろう。

一

趙孟頫（一二五四～一三二二）のあとを承け、仁宗朝から文宗朝にかけて文臣として重きをなしたのは虞集（一二七二～一三四八）であった。虞集は元の代表的詩人であるが、また詞も曲も作っていて、詞三十一首（『全金元詞』下八六

一頁)、散曲一首(『全元散曲』上六九三頁)を今に傳えている。その虞集の「蝶戀花」詞の小序に次のようにいう。

故遼主得其臣所獻黃菊賦、題其後云、昨日得卿黃菊賦、細剪金英題作句、袖中猶覺有餘香、冷落西風吹不去、二月末、與楊鎮庭陳衆仲觀杏城東、坐客有爲予誦此者、因括檃歸腔、令佐酒者歌之

(故の遼主其の臣の獻ずる所の黃菊の賦を得て、其の後に題して云う、昨日得たり　卿の黃菊の賦、細く金英を剪りて題して句と作す、袖中　猶お覺ゆ　餘香の有るを、冷落たる西風も吹きて去らず、と。二月の末、楊鎮庭、陳衆仲と杏を城東に觀る。坐客に予が爲に此を誦する者有り。因りて括檃して腔に歸し、酒を佐くる者をしてこれを歌わしむ)

(『道園遺稿』③巻六)

虞集は、遼主が臣下の賦に題した詩の内容を、「歸腔」つまり「蝶戀花」の曲に合わせて「括檃」したわけだが、それを「佐酒者」おそらくは妓女に歌わせたのである。これは當時詞が歌われていたことを示そう。惜しむらくはこの序に制作時期は記されていない。しかし、それを知る手掛かりはある。虞集は楊鎮庭、陳衆仲の二人と「杏を城東に觀」たと言っている。楊鎮庭がいかなる人物かは分からないが、陳衆仲とは陳旅(一二八七～一三四二)のことであって、『元史』に傳がある。

陳旅、字衆仲、興化莆田人、……適御史中丞馬雍古祖常使泉南、一見奇之、謂旅曰、子館閣器也、胡爲留滯于此。因相勉遊京師、既至、翰林侍講學士虞集見其所爲文、慨然歎曰、此所謂我老將休、付子斯文者矣、卽延至館中、朝夕以道義學問相講習、自謂得旅之助爲多、……除國子助教、居三年、考滿、諸生不忍其去、請於朝、再任焉、元統二年、出爲江浙儒學副提舉、至元四年、入爲應奉翰林文字、至正元年、遷國子監丞、階文林郎、又二年卒、年五十有六

(陳旅、字は衆仲、興化莆田の人なり。……適たま御史中丞の馬雍古祖常泉南に使いし、一たび見てこれを奇とし、旅に

謂いて曰く、子は館閣の器なり。胡爲れぞ此に留滯せる、と。因りて相勉めて京師に遊ばしむ。既に至るや、翰林侍講學士の虞集其の爲る所の文を見、慨然として歎じて曰く、此れ所謂我老いて將に休まんとすれば、子に斯の文を付せん者なり、と。卽ち延きて館中に至らしめ、朝夕に道義學問を以て相講習し、自ら謂えらく、旅の助けを得ること多しと爲す、と。……國子助教に除せられ、居ること三年、考滿ちて、諸生其の去るに忍びず、朝に請えば、再任せり。元統二年、出でて江浙儒學副提舉と爲り、至元四年、入りて應奉翰林文字と爲る。至正元年、國子監丞に遷り、文林郎に階む。又た二年にして卒す。年五十有六なり）

陳旅は大都に出て當時翰林侍講學士であった虞集の知遇を得、その才能を高く評價された。後に國士助教に除せられておそらく六年ほど在任し、次いで江浙儒學副提舉となって大都を離れたという。陳旅が大都を離れた元統二年（一三三四）には虞集はすでに歸隱していたので、④虞集が陳旅と「杏を城東に觀」たのは一三二八年から一三三三年の間のことであったと思われる。つまり、一三三〇年前後に「蝶戀花」の曲は傳承されていて、妓女に歌われていたのである。陳旅の名は、さらに虞集の「賀新郎」詞の小序にも見える。

五月中、以小疾家居、陳衆仲助教言、乳燕飛華屋調最宜時、連度數曲、病其辭妙則聲劣、律穩者語卑、適有友人期家人到官所而弗至、賦此

（五月中、小疾を以て家居す。陳衆仲助教言う、乳燕飛華屋の調は最も時に宜ろし、と。連けて數曲を度るも、其の辭の妙なれば則ち聲劣り、律穩やかなる者は語卑しきを病む。適たま友人の家人の官所に到るを期すも至らざる有れば、此れを賦せり）

（『道園遺稿』卷六）

虞集はここでは陳旅を「陳衆仲助教」と呼んでいる。したがって、この詞も前掲「蝶戀花」と同樣に、陳旅が國士助教であったときに作られたものである。「乳燕飛華屋調」が、「乳燕飛華屋」で始まる蘇東坡の「賀新郎」を指

すことは言うまでもない。東坡のそれが夏景を詠っているので陳旅は「最宜時」と言ったのであろう。それはさておき、數曲を作ったものの「其辭妙則聲劣、律穩者語卑」つまり「歌詞がすぐれていればメロディーに合わずに聞き苦しく、メロディーに合っているものは歌詞が一段落ちる」と歎いたというのは、彼らが「賀新郎」の曲を知っていなければ出てくるはずのない言葉である。陳旅は詞を今に傳えていないのだが、詞にはいささか詳しかったと思われる。それは、虞集の「題宋人詞後」（『道園學古錄』巻四）[5]と題する七絶の序文からも窺える。

紹興間、臨安士人有賦曲、……思陵見而喜之、恨其後疊第五句重攜殘酒酸寒、改曰重扶殘醉、因歐陽原功言及此、與陳衆仲尋腔度之、歌之一再、董北宇求書其事、因書之、幷系以此詩

（紹興の間、臨安の士人に曲を賦する有り。……思陵は見てこれを喜ぶも、其の後疊の第五句「重ねて殘酒を攜う」の酸寒なるを恨み、改めて「重ねて殘醉を扶う」と曰う。歐陽原功の此れに言及するに因って、陳衆仲と腔を尋ねてこれを度り、これを歌うこと一再なり。董北宇其の事を書くを求む。因りてこれを書きて、幷びに系くるに此の詩を以てす）

歐陽原功は歐陽玄（一二八三～一三五七）のことで、一三三〇年前後にやはり朝に在った（『元史』本傳）。董北宇は未詳。「紹興の間」云々のことは周密の『武林舊事』巻三に見え、臨安の士人の賦した曲とは「風入松」詞である。[6]「思陵」とは高宗を指す。この序の言うところは、高宗の手直しした士人の詞を「風入松」の曲に合わせて歌ってみたということである。

以上に擧げた資料は、虞集周邊の狀況を傳えているわけだが、彼らが例外的存在だとは思えない。彼らの背景には詞樂を傳える多くの人々の存在があったはずである。また、楊鎭庭、董北宇については分からないが、虞集が江西臨川の人、陳旅が福建莆田の人、歐陽玄が湖南瀏陽の人であり、すべて南宋の故地の出身であることは留意しておくべきであろう。

二

陳旅の文集を『安雅堂集』という。四庫全書本の卷首には至正九年（一三四九）の張翥（一二八七～一三六八）の原序が見え、その中で次のようにいう。

陳君衆仲爲國子丞、而予助教於學、且居官舍相邇也、其日從論議者、殆踰年

（陳君衆仲は國子丞爲りて、予は學に助教たり。且つ官舍に居ること相邇く、其の日び論議に從う者、殆ど年を踰ゆ）

前掲の『元史』本傳に「至正元年（一三四一）、遷國子監丞、階文林郎、又二年卒、年五十有六」というように、陳旅は至正元年から三年まで國子監丞であり、また『元史』の張翥の本傳には「至正初、召爲國子助教」とある。二人はこの時期に親しく交わったのであった。彼らの「論議」はもちろん學問が中心であったろうが、時には詞に及んだと想像される。なぜならば、張翥こそ元代で最もすぐれるとされる詞人だからである。そこで、『元史』の張翥の本傳をいま少し詳しく見てみよう。

張翥字仲舉、晉寧人、其父爲吏、從征江南、……翥少時負其才雋、豪放不羈、好蹴踘、喜音樂、不以家業屑其意、……乃謝客、閉門讀書、晝夜不暫輟、因受業於李存先生、存家安仁、……翥從之游、……未幾、留杭、又從仇遠先生學、遠於詩最高、翥學之、盡得其音律之奥、於是翥遂以詩文知名一時、已而薄游維揚、居久之、學者及門甚衆、至元末、同郡傅巖起居中書、薦翥隱逸、至正初、召爲國子助教、分教上都生、尋退居淮東

（張翥、字は仲舉、晉寧の人なり。其の父吏爲り、江南に征くに從う。……翥少き時其才の雋なるを負（たの）み、豪放不羈、蹴踘を好み、音樂を喜（この）み、家業を以て其の意を屑しとせず。……乃ち客を謝し、門を閉ざして讀書し、晝夜暫くも輟めず。因りて業を李存先生に受く。存は安仁（饒州）に家し、……翥はこれに從って游ぶ。……未だ幾ならずして、杭に留まり、又た仇遠先生に從いて學ぶ。遠は詩に於て最も高く、翥はこ

れを學んで、盡く其の音律の奥を得たり。是に於て翥は遂に詩文を以て名を一時に知らる。已にして薄(いさ)か維揚（揚州）に游び、居ることこれを久しうし、學ぶ者門に及ぶこと甚だ衆し。至元の末、同郡の傅巖起（孟傳）中書に居り、翥の隱逸を薦む。至正の初め、召されて國子助教と爲り、分かちて上都の生を教う。尋いで淮東に退居す）

張翥はもとは晉寧（山西）の人であるが、父に従って江南に移ったので、江南の人といってもよいだろう。音樂を好んだこと、杭州で宋末元初の詩人であり、詞人としても知られる仇遠に學んだことが、彼をすぐれた詞人たらしめた一因であったろう。その張翥の「春從天上來」詞（彊村叢書本『蛻巖詞』巻上）の小序に次のようにいう。[7]

廣陵冬夜、與松雲子論五音二變十二調、且品簫以定之、……松雲子吹春從天上來曲、音韻凄遠、予亦飄然作霞外飛仙想、因倚歌和之、用紀客次勝趣、是夕丙子孟冬十又三夕也

（廣陵の冬夜、松雲子と五音二變十二調を論じ、且つ簫を品して以てこれを定む。……松雲子春は天上從り來るの曲を吹けば、音韻凄遠たり。予も亦た飄然として霞外の飛仙の想いを作す。因りて倚歌してこれに和し、用て客次の勝趣を紀(しる)せり。是の夕べは丙子孟冬十又三の夕べなり）

丙子の年すなわち順帝の至元元年（一三三六）の十月十三日夜、揚州で松雲子[8]と音樂を論じ合ったが、そのとき松雲子が簫で「春從天上來」の曲を吹いたので、曲に合わせて歌詞を作ってこのことを詠じたというのである。張翥と松雲子は明らかに「春從天上來」の曲を知っていた。さらに張翥の「聲聲慢」詞（同前巻下）の小序には、

揚州箏工沈生彈虞學士浣溪沙、求賦

（揚州の箏工の沈生　虞學士の浣溪沙を彈じ、賦すを求む）

とある。[9]ここでも箏工の沈生が虞集の「浣溪沙」詞を演奏した（あるいは妓女が歌詞を歌ったのかも知れない）と

言っているわけだが、この「聲聲慢」はその求めに應じて作ったのであり、前闋では、

金鑾學士
天上歸來
蘭舟小駐蕪城
供奉新詞
幾度慣賦鳴箏
相逢沈郎絕藝
爲尊前　細寫餘情

金鑾の學士
天上より歸り來り
蘭舟　小らく蕪城に駐まれり
供奉の新詞
幾度か鳴箏に賦すに慣れたる
沈郎の絕藝の
爲に尊前に　細やかに餘情を寫

とうたう。「金鑾學士」とは虞集を指し、冒頭三句は、虞集が朝を退き、歸郷の途次に蕪城（揚州）に立ち寄ったことをいう。そのときに虞集は沈生に逢ったものと思われる。

すに相逢えり

問何似
似秦關雁度
楚樹蟬鳴

何にか似ると問わば
似たり　秦關に雁の度り
楚樹に蟬の鳴くに

したがって、この「聲聲慢」は、一三三三年以後の作となろう。[10]「聲聲慢」はいざ知らず、當時「浣溪沙」の曲が傳わっていたのは疑いないところである。

『全金元詞』によれば、張翥は百三十三首の詞をいまに傳え、その半數を越える七十四首が慢詞である。かつ慢詞の詞牌は四十五種に達する。[11]このように慢詞を多作し、その詞牌の種類も多い詞人を宋代に求めれば、柳永、周邦彦、姜夔、吳文英、周密、張炎が擧げられる。いずれも音樂に精通した詞の專家である。張翥がただ宋人の歌詞のみを見て、それを模倣して詞を塡めたとは考えられない。[12]さらに、仇遠に學んだことに留意すれば、張翥はかなりの數の曲を知っていたと思われるのである。十四世紀に入っても、張翥ほどの人は稀だとしても、詞樂は滅亡の危機に瀕するような狀況にはなかったのである。

張可久（一二八〇？～一三四九以後）は張翥とほぼ同時代の人であるが、詞ではなくて散曲の作者として著名である。その作品にも實は詞樂への言及を見出せるのである。張可久は浙江寧波の人で、少數ながら詞も傳える。その「百字

令（念奴嬌）」詞（『張可久集校注』[13] 五八二頁）の小序に、

舟泊小金山下、客有歌大江東去詞者、喜而爲賦
（舟にて小金山の下に泊る。客に大江東去の詞を歌う者有り、喜びて爲に賦す）

とあり、本文に、

倦客能吟　倦客　能く吟じれば
倚歌而和　倚歌して和し
醉寫滄浪曲　醉いて寫す　滄浪の曲

とある。旅人のなかに「大江東去詞」すなわち蘇東坡の「念奴嬌」を歌う者があったのを喜び、みずからもそれに「倚歌而和」して、一首をものしたというのである。張可久は、さらに散曲のなかでも、當時詞が歌われていたことを傳えている。

（中呂）朝天子　梅友元帥席上（朝天子　梅友元帥の席上にて）

老夫　老夫は
病餘　病の餘（のち）
尙草長門賦　尙お草す　長門の賦
阿蓮嬌吻貫驪珠　阿蓮の嬌吻　驪珠を貫き
試聽鶯啼序　試みに聽く　鶯啼序
玉露冰壺　玉露　冰壺
香風瓊樹　香風　瓊樹
醉歸來不用扶　醉って歸り來るも扶（たす）くるを用いず
小奴　小奴
按舞　按舞し
看了梅花去　梅花を看了（おわ）りて去れり
（『張可久集校注』一一九頁）

「梅友元帥」がいかなる人物かは知れないが、その宴席で妓女「阿蓮」の歌ったのは最長編の「鶯啼序」であったという。

三

次は虞集や張翥より少し後の世代の人々を取り上げよう。まずは顧德輝[14]（一三一〇～一三六九）である。顧德輝は江蘇崑山の人で、代々の素封家であったが、四十歳過ぎに家産を譲り、園林「玉山佳處」を營んで文事にいそしみ、悠々自適の生活を送った人物である。當時の江南の文人たちのパトロン的存在でもあった。明の朱珪編『名蹟錄』（四庫全書本）卷四に收める顧德輝自撰の「金粟道人顧君墓志銘」には、

三十而棄所習、復讀舊書、日與文人儒士爲詩酒友、又頗鑒古玩好、年踰四十、田業悉付子壻、于舊第之西偏、壘石爲小山、築草堂于其址、左右亭館若干所、傍植雜花木、以梧竹相映帶、總名之爲玉山佳處

（三十にして習う所を棄て、復た舊書を讀み、日び文人儒士と詩酒の友と爲る。又た頗る古玩の好きを鑒す。年四十を踰えて、田業を悉く子壻に付し、舊第の西偏に于て、石を壘みて小山を爲り、草堂を其の址に築く。左右の亭館若干所、傍に雜花木を植え、梧竹を以て相映帶せしめ、總べてこれを名づけて玉山佳處と爲す）

という。顧德輝は知友の作品を收めて小傳を付した『草堂雅集』および「玉山佳處」を詠じた作品を集めた『玉山名勝集』を編んでおり、ともに四庫全書に收められている。これは、當時の江南文人社會の狀況や交流を探る上で重要な資料である。その顧德輝の「題桐花道人卷」と題する「清平樂」詞の序[15]に、次のようにある。

桐花道人吳國良、雪中自雲林來、持所製桐花煙見遺、留玉山中數日、……道人復以碧玉簫作清平樂、……時至正十年臘月廿二日也

（桐花道人吳國良、雪中に雲林自り來り、製る所の桐花煙を持ちて遺らる。玉山中に留まること數日、……道人復た碧玉の簫を以て清平樂を作す。……時に至正十年臘月廿二日なり）

（讀畫齋叢書本『玉山逸稾』巻二）

吳國良は吳善のことで、元、孔齊『至正直記』[16]巻二「墨品」に、

江南之墨、稱于時者三、龍游、齊峯、荆溪也、……後至元間、姑蘇一伶人吳善字國良者、以吹簫游于貴卿士大夫之門、偶得造墨法來荆溪

（江南の墨、時に稱せらるる者は三、龍游、齊峯、荆溪なり。……後至元の間に、姑蘇の一伶人吳善字は國良なる者、簫を吹くを以て貴卿士大夫の門に游び、偶たま造墨の法を得て荆溪に來る）

というように、墨の製作と簫の演奏で知られていた。その吳善がみずから製作した墨を攜えて玉山佳處に至り、「清平樂」の曲を簫で演奏したのである。それは至正十年すなわち一三五〇年の十二月、すでに元末のことであった。

さて、「清平樂」の序にいう「雲林」とは何處かといえば、元末の代表的畫家、倪瓚（一三〇一～一三七四）の無錫の園林である。吳善は倪瓚とも親交があり[17]、このときは荆溪（宜興）からまず無錫の倪瓚を訪ね、次いで崑山の顧德輝を訪ねて來たらしい[18]。そして、倪瓚の尺牘「與彝齋學士先生」（『清閟閣全集』巻十）」も詞樂に關わる情報を傳えてくれている。

瓚再拜、夜來獲聚言笑之樂、經宿不面、想履候平善也、漢鑑書中有一紙草稿、恐在葉內、蓬上雨潺潺、及白推訪寄、幸一檢付、無則已、幷書院中几上、有貞居寫夷則宮雪獅兒二詞、後有賤子寫滿江紅未了、如在彼、乞付至、檢本寫足付去、不在則已

（瓚再拜す。夜來聚いて言笑するの樂しみを獲たり。經宿面わざれば、候を履むこと平善なるを想う。漢鑑書中に一紙の草稿有り、恐らくは葉內に在らん。蓬上に雨潺潺たれば、白むに及んで推して訪ね寄するなり。幸いに一たび檢べ付せよ。無くば則ち已む。幷びに書院中の几上に、貞居の寫せる夷則宮の雪獅兒の二詞有り、後に賤子の寫せる滿江紅の未だ了ら

ざる有り。如し彼に在らば、乞う付し至らんことを。本を檢べて寫し足らば付し去らん（？）。在らずば則ち已む）

「彝齋學士」とは、王令顯、字は光大のこと。宜興の人で倪瓚と親しく交わっていたらしいことが『清閟閣全集』から知れる。「貞居」は張雨。この書簡の內容は分かりにくいのだが、王令顯に昨夜の歡談の折に貸した（？）本（『漢鑑書』については未詳）に草稿が挾まっていないか、また、張雨が書いた「夷則宮雪獅兒二詞」とみずからの書きかけの「滿江紅」の原稿も見當たらないのでそちらにないか、と言っているらしい。注目すべきは「夷則宮雪獅兒二詞」の部分である。夷則宮は曲調名で、俗名は仙呂宮という。「四犯剪梅花」は、前後関ともに「解連環」→「醉蓬萊」→「雪獅兒」→「醉蓬萊」と曲調を轉じさせるものだが、萬樹『詞律』卷十四は宋の劉過の作を擧げて次のように注記する。

此調爲改之所創、採各曲合成、前後各四段、故曰四犯、柳詞醉蓬萊屬林鍾商調、或解連環、雪獅兒亦是同調也（此の調は改之（劉過）の創る所と爲す。各曲を採りて合成し、前後は各おの四段なり。故に四犯と曰う。柳（永）詞の醉蓬萊は林鍾商調に屬せば、或は解連環、雪獅兒も亦た是れ同調ならん）

萬樹は「雪獅兒」は林鍾商（俗名）の曲だろうと言うが、殘念ながら「雪獅兒」がどの曲調の曲であったかを傳える資料は見つからない。いずれにしても、詞牌「雪獅兒」にわざわざ曲調名を付しているのは、その曲が傳存していた可能性がきわめて高いことを示唆している。

次に、顧德輝、倪瓚の二人と交流があり[19]、當時の江湖の詩壇の指導者であった[20]楊維楨（一二九六～一三七〇）の例を擧げよう。まず、「香奩集序」（四部叢刊本『鐵雅先生復古詩集』卷五）である。

雲間詩社香奩八題、無春坊才情者、多爲題所困、縱有篇什、正如三家村婦學宮妝院體、終帶鄙狀可醜也、晚

得玉樓子八作、衆推爲甲、而長短句樂府絶無可拈出者、雲庵老先生寄示踏莎行八闋、讀之驚喜、先生蓋松雪翁門倩、今年八十有三矣、而堅強清爽、出語娟麗流便、此殆雪月中神仙人也、謹以付翠兒、度腔歌之、又評付龍洲生、附八詠詩後繡梓、以見王孫門中舊時月色、雖閲喪亂、固無恙也、至正丙午春三月初吉、錦窠老人楊楨敍

（雲間詩社の香奩八題は、春坊の才情無き者は、多く題の困しむる所と爲る。縱い篇什有れども、正に三家村婦の宮妝院體を學ぶが如く、終に鄙狀を帶びて醜（にく）む可し。晩に玉樓子の八作を得て、衆は推して甲と爲す。而も長短句の樂府は絶えて拈（と）り出だす可き者無し。雲庵老先生寄せて踏莎行八闋を示せば、これを讀みて驚喜す。先生は蓋し松雪翁の門倩にして、今年八十有三なるも、而も堅強清爽にして、語を出だすこと娟麗流便として、此れ殆ど雪月中の神仙の人なり。謹んで以て翠兒に付し、腔を度（はか）りてこれを歌わしむ。又た評して龍洲生に付し、八詠詩の後に附して繡梓せしめ、以て王孫門中の舊時月色の、喪亂を閲すと雖も、固より恙無きを見（あら）わす。至正丙午春三月の初吉、錦窠老人楊楨敍す）

楊維楨は、浙江諸暨の人で、元末は浙江松江に假寓していた。[21] 文中の「雲間」は松江のことである。楊維楨は雲間詩社の指導者であったと思われる。序文のいうところは、雲間詩社で韓偓の香奩體の題詠を競ったところ、みな苦勞した。ようやく「玉樓子」の作（詩であろう）を得て、これが第一とされたが、「長短句樂府」には取り上げるべき作がなかった。そこに「雲庵老先生」が「踏莎行」八首を寄せてくれ、それが素晴らしい出來だったので、評語を加えて（自作の）「八詠詩」の後に附して刊行させる、ということらしい。「玉樓子」は詩社のメンバーの號であろうが、詳細は分からない。「雲庵」の方は王國器（一二八四～一三六六以後）のことで、字は德璉、號を雲庵という。浙江湖州の人で、文中に「松雪翁門倩」というように、かの趙孟頫の女婿であった。當時八十三歳の高齡にも關わらず、矍鑠としたものだったらしい。さて、その王國器が寄せた「踏莎行」だが、「踏莎行」は詞にも北曲にもあるので、

「長短句樂府」というだけでは果たしていずれであったのか分からない。しかし、『復古詩集』は八題それぞれの七律に王國器の「踏莎行」を付しており、たとえば第一題「金盆沐髮」の「踏莎行」は、

寶鑑凝膏、溫泉流膩。瑤纖一把青絲墜。氷膚淺漬麝煤春、花香石髓和雲洗。　玉女峰前、咸池月底。臨風輕把犀梳理。陽臺行雨乍歸來、羅巾猶帶瀟湘水。

というものである。これはまさに詞の「踏莎行」であり、北曲の「踏莎行」の句式は全く異なる。[22]「長短句樂府」とは詞であったと知れる。楊維楨はこれを「付翠兒、度腔歌之」つまり歌妓に歌わせたのである。序文の書かれたのは「至正丙午」すなわち至正二十六年（一三六六）であり、それは元の滅亡の前年であった。そして、「以見王孫門中舊時月色、雖閲喪亂、固無恙也」とは、「喪亂」の語が直接的には元末の喪亂を指すのはもちろんだが、南宋、さらに溯れば六朝以來の江南の文化の傳統に思いを馳せているようにも思われる。なお、「龍洲生」とは、『復古詩集』の編者で楊維楨の門人でもある章琬、字は孟文のことで、雲間の人である。

楊維楨の例をもうひとつ擧げよう。「花游曲」序（四部叢刊本『鐵崖先生古樂府』卷三）である。

至正戊子三月十日、偕茅山貞居老仙、玉山才子、烟雨中遊石湖諸山、老仙爲妓者瑤英賦點絳唇詞、已而午霽、登湖上山、歇寶積寺行禪師西軒、老仙題名軒之壁、瑤英折碧桃花、下山、予爲瑤英賦花游曲、而玉山和之

（至正戊子三月十日、茅山の貞居老仙、玉山才子と偕に、烟雨の中に石湖の諸山に遊ぶ。老仙は妓者の瑤英の爲に點絳唇詞を賦す。已にして午に霽れ、湖上の山に登り、寶積寺の行禪師の西軒に歇む。老仙軒の壁に題名し、瑤英は碧桃花を折る。山を下り、予は瑤英の爲に花游曲を賦し、玉山これに和す）

「至正戊子」とは至正八年（一三四八）、「貞居老仙」と

は張雨、「玉山才子」とは顧徳輝である。これによれば張雨が妓女の璚英のために「點絳唇」の歌詞を書いてやったのであるが、もちろんそれは彼女に歌わせるためであったろう。[23]「花游曲」は「二月十日春濛濛、滿江花雨濕東風、美人盈盈烟雨裏、唱徹湖烟與湖水」と歌い始める。[24]

さらに、楊維楨の門弟の袁華（一三一六～？）の「天香詞」序（四庫全書本『可傳集』[25]）もまた、當時詞が歌唱されていたことを示す。

至正龍集壬辰之九月、玉山主人宴客於金粟影亭、時天宇澂穆、丹桂再花、水光與月色相盪、芳香共逸思俱飄、衆客飲酒樂甚、適錢塘桂天香氏來、靚粧素服、有林下風、遂歌淮南招隱之詞、玉山於是執觴起而言曰、夫桂盛于秋、不凋于冬、又不與桃李競秀、或者以爲月中所植、信有之矣、今桂再花、天香氏至、豈非諸君子躡雲梯、占鰲頭之徵乎、請爲我賦之、汝陽袁華子英、乃口占水調、俾歌以復主人、率座客咸賦焉、詞成者六人

（至正龍集壬辰の九月、玉山主人客を金粟影亭に宴す。時に天宇澂穆として、丹桂再び花ひらき、水光は月色と相盪ぎ、芳香は逸思と倶に飄り、衆客酒を飲んで樂しむこと甚し。適たま錢塘の桂天香氏來り、靚粧素服にして、林下の風有り。遂に淮南招隱の詞を歌う。玉山是に於て觴を執りて起ちて言いて曰く、夫れ桂は秋に盛んにして、冬に凋れず、又た桃李と秀を競わず、或者以て月中に植うる所と爲すは、信にこれ有り。今桂の再び花さき、天香氏至るは、豈に諸君子の雲梯を躡み、鰲頭を占むるの徵に非ざらんや。請う我が爲にこれを賦せ、と。汝陽の袁華子英、乃ち水調を口占して、歌いて以て主人に復えしむ。率ね座客咸賦せり。詞の成る者は六人なり）

至正壬辰すなわち至正十二年（一三五二）の九月、顧徳輝の玉山佳處での宴に、當時の錢塘の名妓桂天香がやって來て、素晴らしいのどを披露した。袁華は主人顧徳輝の求めに應じて、「水調（水調歌頭）」の詞を作って彼女に歌わせたところ、座に在った者五人も續いて作ったという。『玉山名勝集』巻八には、袁華、于立、顧徳輝、岳榆、陸

仁、張遜の六人の「水調歌頭」が收められている。なお、岳楡の作には「天香、姓桂、名眞」との注記がある。

四

顧德輝、倪瓚、楊維楨は明代に入るとすぐに亡くなっている。ここでは十四世紀末まで活躍した人物を取り上げる。まず王行（一三三二～一三九五）である。王行は、字は止仲といい、半軒などと號した。江蘇吳縣の人で、『墓銘擧例』の著者として知られる。その「聯芳詞」序（四庫全書本『半軒集』卷十一）には次のようにいう。

青陽肇令、淑氣載新、萬卉未芳、梅先應候、繼梅而豔、惟杏能之、梅杏聯芳、春物滋麗、韶華九十、二卉開端、杏雖晚生、見梅之清、深知加敬、故度夷則商一曲以美之、曲曰品字令、梅亦愛杏之麗、因荅以夾鐘商之曲、曰迎春樂、春見二卉交歡、不能自默、亦度林鐘羽一曲以嘉賞焉、曲曰解語花、夫梅杏皆色以事春者、乃能不妬忌而相敬愛、贊美如此、可謂賢矣、既賢之、其詞不可不錄、故錄之

（青陽肇めて令し、淑氣載ち新たなり。萬卉未だ芳らず、梅先ず候に應ず。梅を繼いで豔やかなるは、惟だ杏のみこれを能くす。梅杏芳を聯ね、春物滋いよ麗し。韶華九十にち、二卉端を開く。杏は晩く生ずると雖も、梅の清らかなるを見て、深く敬を加うるを知る。故に夷則商の一曲を度りて以てこれを美し、曲を品字令と曰う。梅も亦た杏の麗しきを愛づ。因りて荅うるに夾鐘商の曲を以てし、迎春樂と曰う。春は二卉の交歡するを見て、自ら默する能わず、亦た林鐘羽の一曲を度りて以てこれを嘉賞す。曲を解語花と曰う。夫れ梅と杏とは皆色を以て春に事うる者なれば、乃ち能く妬忌せずして相敬愛し、贊美すること此くの如し。賢と謂う可きなり。既にこれを賢とすれば、其の詞は錄さざる可からず。故にこれを錄す）

これは直接に詞の歌唱のことを言うものではないが、「度夷則商一曲以美之、曲曰品字令」、「荅以夾鐘商之曲、曰迎春樂」、「亦度林鐘羽一曲以嘉賞焉、曲曰解語花」と、

曲調に言及していることに注目したい。「夷則商」は俗名「商調」、「夾鐘商」は俗名「雙調」、「林鐘羽」は俗名「高平調」である。王行はこの三曲（同名の曲牌は北曲にない）を知っていたか、あるいは樂譜を見ていたと思われるのである。なお、「品字令」は「品令」のことで、王行の作は『詞律』巻五に見える周邦彦の五十五字體である。[26] さらに王行の例を擧げれば、同じく『半軒集』巻十一に見える「清風八詠樓　贈送朱彦祥」の序がある。

沈隱侯守東陽、建八詠樓、……朱公子彦祥家本吳、喜遊歴、時寓東陽、一住十餘載、今年六月、還訪親舊、秋復南轅、約來春攜其德曜驥子、歸復故宇、臨歧無以寓情、因尋林鐘商曲有名清風八詠樓者、南宋詞林所製也、調既適時、譜又合東陽故事、塡一闋以餞云

（沈隱侯は東陽に守たりて、八詠樓を建つ。……朱公子彦祥は家は本より吳にして、遊歴を喜び、時に東陽に寓し、一たび住んで十餘載なり。今年六月、還りて親舊を訪ね、秋に復た南轅し、來春其の德曜と驥子とを攜えて、故宇に歸復するを約す。歧れに臨んで以て情を寓する無し。因りて林鐘商の曲を尋ねて清風八詠樓と名づくる者有り、南宋詞林の製る所なり。調は既に時に適い、譜も又た東陽の故事に合えば、一闋を塡めて以て餞すと云う）

「八詠樓」は、南朝齊の東陽太守沈約の創建にかかり、宋代に至って沈約の「八詠詩」に因んでかく名付けられた。東陽は浙江婺州のこと。王行は、鄕里の吳に妻子（德曜は後漢の隱士梁鴻の妻孟光の字）を連れ歸るために東陽に向かう朱彦祥に、送別の詞を贈った。その際、秋に相應しい曲調である「林鐘商」すなわち俗名でいえば「歇指調」（北曲では用いない）の曲の中から、これから向かう東陽に因んで「清風八詠樓」を選んだというのである。王行はやはり詞樂に詳しかったと思われる。あるいは詞の樂譜集を所有していたのかも知れない。なお、王行は「清風八詠樓」を「南宋詞林所製」というが、他に關連する資料を見出せない。博雅のご示教を請う。

最後に、劉楚（一三二一～一三八一）の「劉尙賓東溪詞稿

後序」（嘉靖元年徐冠刻本『槎翁文集』巻八）を擧げておこう。劉楚は字を子高といい、明に入って名を崧と改め、吏部尚書に至った（『明史』本傳）。江西泰和の人である。

余友陳子泰、蕭子儀數過余、稱東溪劉尚賓之賢、因出其所賦詞藁一帙、凡數十闋、余亟請誦之、……昔稼軒送春一詞、沈痛忠憤、悲動千古、至今讀之、使人毛髮寒竪、淚落胸臆、眞悲歌慷慨之雄士哉、尚賓芳年雅志、亹亹傾竭、庶幾聞風而興者、惜余不習音律、不能爲尚賓商歌之、然憂患之餘、亦不忍聞矣、余友有蕭狎者、雅好古、善洞簫、他日尚賓能過余武山北岩下、風清月白之夕、當與數子者命洞簫爲子和品令之章、而尚賓自歌之、其亦有足樂於余志者乎、二友歸、其爲尚賓言之

（余が友陳子泰、蕭子儀は數しば余に過り、東溪の劉尚賓の賢なるを稱え、因りて其の賦する所の詞藁一帙を出だす。凡そ數十闋なり。余亟ちこれを誦するを請う。……昔稼軒の送春の一詞、忠憤沈痛にして、千古を悲動す。今に至りてこれを讀めば、人をして毛髮寒け竪ち、淚胸臆に落とさしむ。眞に悲歌慷慨の雄士たるかな。尚賓は芳年の雅志を、亹亹として傾け竭くし、風を聞いて興こる者に庶幾し。惜しむらくは余は音律に習わず、尚賓の爲にこれを商歌する能わず。然れども憂患の餘、亦た聞くに忍びず。余が友に蕭狎なる者有りて、雅に古を好み、洞簫を善くす。他日尚賓能く余が武山の北岩の下に過らば、風清く月白きの夕べに、當に數子の者と洞簫を命じて子が爲に品令の章に和せしめ、尚賓自らこれを歌うべし。其れ亦た余が志を樂しましむるに足る者有らんか。二友歸らば、其れ尚賓の爲にこれを言え）

劉楚は『東溪詞稿』の作者劉尚賓を辛棄疾に擬して稱揚する。ただし、劉尚賓の閲歴については分からない。これによれば、劉楚自身は「余不習音律」というように、音樂は得手ではなかったらしいが、友人の蕭狎は洞簫を吹いて詞を演奏できたし、劉尚賓は詞を歌えたらしいのである。詞を作る者は歌えて當然だと劉楚は思っていたのかも知れない。

以上、これまで述べて來たところをまとめれば、南宋の

故地江南においては、元代でも詞樂は生きていたと考えざるを得ないということになる。そして、餘波は少なくとも明初の十四世紀末までに及んでいたのである。

五

江南においては、詞樂は元一代を通じて傳えられていた。決して北曲に壓倒されて消滅したわけではない。詞曲は並存していたと思われる。しかし、明人はしばしば詞は北曲に壓倒されたと言う。一例を擧げれば、徐謂『南詞敘錄』(27)（嘉靖三十八年（一五五九）序）に、

元初、北方雜劇流入南徼、一時靡然向風、宋詞遂絶

（元初、北方の雜劇流れて南徼に入り、一時に靡然として風に向かう。宋詞遂に絶えたり）

今之北曲、蓋遼金北鄙殺伐之音、壯偉很戾、武夫馬上之歌、流入中原、遂爲民間之日用、宋詞既不可被弦管、南人遂尚此

（今の北曲は、蓋し遼金の北鄙殺伐の音にして、壯偉にして很戾たり。武夫馬上の歌、流れて中原に入り、遂に民間の日用と爲る。宋詞既に弦管を被むる可からず、南人遂に此を尚ぶ）

というのは、その早い例だと思うが、徐謂は二百年以上の時を經た嘉靖年間の現狀を、そのまま元代に當てはめただけであろう。それよりも、元人自身が詞樂の絶えたことを言うものとしてよく引かれる文章がある。虞集の「葉宋英自度曲譜序」（『道園學古錄』卷三十二）である。これは臨川の詞人、葉宋英の自作曲集のために書かれたものであるが、そのなかに次のようにある。

近世士大夫、號稱能樂府者、皆依約舊譜、倣其平仄、綴緝成章、徒諧俚耳則可、乃若文章之高者、又皆率意爲之、不可叶諸律不顧也、太常樂工知以管定譜、而撰詞實腔、又皆鄙俚、亦無足取、求如三百篇之皆可弦歌、其可得乎

（近世の士大夫の、樂府を能くするを號稱する者は、皆舊譜に依約し、其の平仄に倣い、綴緝して章を成す。徒だ俚耳に諧えば則ち可なり。乃ち文章の高き者の若きも、又た皆率意にしてこれを爲り、律に叶う可からざるも顧みず。太常の樂工は管を以て譜を定めて、詞を撰して腔に實つるを知るも、又た皆鄙俚にして、亦た取るに足る無し。三百篇の皆弦歌す可きが如きを求むるも、其れ得可けんや）

元代に詞樂の傳承が絶えたとする論者は、おそらく「近世士大夫、號稱能樂府者、皆依約舊譜、倣其平仄、綴緝成章」の部分のみから結論を導き出しており、いわゆる「斷章取義」に陥っていると思われる。この部分は、三つのタイプの作詞者を對比しつつ論じているのであって、一つは「號稱能樂府者」つまりみずから詞の名手を任じている者、二つには「文章之高者」つまり文章にすぐれた者、三つには「太常樂工」つまり專門の樂士、である。虞集は、「號稱能樂府者」は舊人の歌詞をそっくりまねして（實は曲に合っていないということだろう）俚俗に受ける歌詞を作っているだけ、「文章之高者」は適當に作ってメロディーに合っていなくても氣にしない、「太常樂工」は音樂の專門家らしくメロディーに合わせた歌詞を作るが、それは俗で取るに足らない、メロディーにもぴったり合い、かつ俗に墮しない詩經のような作品は滅多にお目にかかれない、と言っているのである。そして、これを承け、その滅多にお目にかかれないすぐれた詞人のひとりが葉宋英だとして、

臨川葉宋英、予少年時識之、觀其所自度曲、皆有傳授、音節諧婉、而其詞華則有周邦彦姜夔之流風餘韻、心甚愛之

（臨川の葉宋英は、予は少年の時にこれを識れり。其の自度する所の曲を觀るに、皆傳授有り。音節諧婉にして、其の詞華は則ち周邦彦姜夔の流風餘韻有り。心に甚だこれを愛す）

というのである。虞集は、詞樂が傳承を斷たれて歌唱できなくなっているとは、決して言っていない。

先に注⑤で觸れたように、虞集の文集は通行の『道園學

古録』とは別に『道園類稿』もあり、両者の間にはしばしば作品の出入りや文字の異同が見える。とくに、この「葉宋英自度曲譜序」は文章の趣旨に違いはないが、文字にはかなりの異同がある。[28] そこで『道園類稿』本の本文の對應する部分も擧げておこう。あるいは、こちらの方が虞集の意圖を理解しやすいかも知れない。

今民俗之聲樂、自朝廷官府皆用之、士大夫或依聲而爲之辭、善聽者或愕然不知其歸也、前朝文士、或依舊曲譜而新其文、往往不協於律、歌者委曲融化而後可聽焉、樂府之工、稍以鄙文實其譜、於歌則協矣、而下俚不足觀也。識者常兩病之、臨川葉宋英、天性妙悟、能自製譜。而其文華、乃在周美成姜堯章之次、發乎情而不至於蕩、宣其文而不至於靡、有爾雅之風焉

（今民俗の聲樂は、朝廷官府自り皆これを用う。士大夫或は聲に依りてこれが辭を爲るも、善く聽く者は或は愕然として其の歸するを知らず。前朝の文士も、或は舊曲の譜に依りて其の文を新たにすれば、往往にして律に協わず、歌者の委曲し融化して而る後に聽く可し。樂府の工は、稍や鄙なる文を以て其の譜に實てれば、歌に於ては則ち協うも、下俚にして觀るに足らざるなり。識者常に兩つながらこれを病とす。臨川の葉宋英は、天性妙悟にして、能く自ら譜を製る。而して其の文華は、乃ち周美成姜堯章の次に在り。情に發して蕩に至らず、其の文を宣べて靡に至らず、爾雅の風有り）

「前朝文士」とは、おそらく宋人を指すのであろうが、實際に宋代においても、蘇東坡を代表とする音樂的には非專門家の詞は曲に合わない、としばしば言われたのは詳說する必要もあるまい。いま、ひとつだけ例を擧げれば、沈義父『樂府指迷』去聲字の項に「腔律豈必人人皆能按簫塡譜（腔律は豈に必ずしも人人皆能く簫を按じて譜を塡めんや）」とあるが、村上哲見氏は「吳文英（夢窗）とその詞[29]」でこの條を引き、

宋代の詞の作者のすべてが、音樂に通じた上で作っているわけではない。だからこの面からいうと、宋代の

詞人には、單に句法、押韻、平仄などを按じて作詞し、歌うことは樂工にまかせるというような人と、みずから音樂にも通じ、微妙なところまで樂曲に合わせて詞を作る人との二種があったといえる。後者は專門的詞人であり、前者はいわばしろうとの旦那藝のようなものと解してよいであろう。

という。音樂に通じず、いわゆる「樂譜の讀めない」者は、旁譜を見て曲を再現させて、それに合うように歌詞を塡めることはできないだろう。メロディーを知らなければ、旁譜を見てもメロディーを十全に想起することができなかったはずである。したがって、勢い單に平仄を合わせて新しい歌詞を作るしかなくなるのである。宋代においても、專家といわれる詞人を除けば、多くの詞人は限られた數の詞牌しか使っていない。とくに慢詞はそうである。[30] 曲にぴったり合い、かつ文學的にすぐれた歌詞を作るのは難しい。これは士大夫の歌辭文藝に當初から付きまとう宿命であった。

確かに、『中原音韻』（訥菴本）に收められる羅宗信の序には、「學宋詞者、止依其字數而塡之耳（宋詞を學ぶ者は、止だ其の字數に依ってこれを塡めるのみ）」とあって、あたかも詞樂が滅びてしまったかのように思わせるが、これは北曲の宣揚を目的とした、爲にする議論であろう。『中原音韻』が成立したのは、元の泰定元年（一三二四）であり、當時詞樂が生きていたと考えるべきはすでに述べたところである。それよりも、我々は明の吳訥（一三六八～一四五四）の言葉に耳を傾けよう。吳訥は、字を敏德、號を思庵といい、江蘇常熟の人である。『明史』本傳によれば、永樂年間に醫をもって京師に出、監察御史から左副都御史に至った。正統四年（一四三九）に致仕している。謚は文恪。吳訥は各種文體を論じて模範作を輯めた『文章辨體』で知られる。「外集序題目錄」の「卷五　近代詞曲」の條で彼は次のように言う。[31]

竊嘗因而思之、凡文辭之有韻者、皆可歌也、第時有升降、故言有雅俗、調有古今爾、昔在童稚時、獲侍先生

長者、見其酒酣興發、多依腔塡詞以歌之、歌畢、顧謂幼稚者曰、此宋代慢詞也、當時大儒、皆所不廢、今間見草堂詩餘、自元世套數諸曲盛行、斯音日微矣、迨余既長、奔播南北、鄉邑前輩、零落殆盡、所謂塡詞慢調者、今無復聞矣

（竊かに嘗て因りてこれを思うに、凡そ文辭の韻有る者は、皆歌う可きなり。第だ時に升降有れば、故に言に雅俗有り、調に古今有るのみ。昔童稚の時に在りて、先生長者に侍るを獲て、其の酒酣にして興發し、多く腔に依りて詞を塡めて以てこれを歌うを見る。歌い畢りて、顧みて幼稚の者に謂いて曰く、此れ宋代の慢詞なり、と。當時の大儒は、皆廢せざる所なり。今間に草堂詩餘を見るのみ。元の世に套數の諸曲盛行して自り、斯の音日びに微えり。余の既に長じて、南北に奔播するに迫んで、鄉邑の前輩は、零落して殆ど盡き、所謂慢調を塡詞する者、今は復た聞く無し）

吳訥は、少年のころ、酒宴の折に長老たちが曲に合わせて詞を作って歌うのを聞いている。長老は、宋代の慢詞だ、と言った。吳訥に據れば、當時の學者はみな慢詞をなお作れたという。それは吳訥の生年から考えるに、一三八〇年前後のことであったろうか。やはり十四世紀末までは詞樂は生きていたのである。吳訥は『百家詞』の編者でもあった。[32]

おわりに

十五世紀以降にも、詞樂が傳わっていた可能性を示唆する資料はある。例を擧げれば、まず吳寬（一四三五～一五〇四）の「跋天全翁詞翰後」（四部叢刊本『匏翁家藏集』卷四十九）には、

長短句莫盛於宋人、若吾鄉天全翁、其庶幾者也、……既沒、而前輩風流文采、寥寥乎不可見已、明古舊爲翁所知愛、得此數篇、示予光福舟中、酒酣耳熱、相與歌一二闋、水風山月間、有不勝其嘅然者矣

（長短句は宋人より盛んなるは莫し。吾が鄉の天全翁の若きは、其れ庶幾き者ならん。……既に沒して、前輩の風流文采

は、寥寥乎として見る可からざるのみ。明古は舊翁の知愛する所と爲る。此の數篇を得て、予に光福（江蘇吳縣の西）の舟中にて示す。酒酣にして耳熱く、相與に一二闋を歌う。水風山月の間、其の嘅然たるに勝えざる者有り）

とある。吳寬は、字を原博といい、江蘇長洲の人である。この跋は、「天全翁」すなわち徐有貞（一四〇七～一四七二）、字は元玉（江蘇吳縣の人）の詞稿のために書かれたものである。また、「明古」とは史鑑の字で、吳寬に「隱士史明古墓表」（『匏翁家藏集』卷七十四）がある。そして、その史鑑にも「書贈卜子華詞後」（四庫全書本『西村集』卷六）があり、次のように言う。なお、「卜子華」については未詳。

自金源氏入中國、有新聲樂府、卽今所謂北曲也、元人因之、遂大行於世、而唐宋之音則幾乎熄矣、然浙人所歌、猶舊聲也、豈當南渡之後、流風遺韻、猶有存者乎、今聞子華之歌、紆徐宛轉、得古人一唱三歎之旨、因戲塡一闋遺之

（金源氏の中國に入りて自り、新聲の樂府有り。卽ち今の所謂北曲なり。元人これに因り、遂に大いに世に行なわれて、唐宋の音は則ち幾乎ど熄めり。然れども浙の人の歌う所は、猶お舊聲なり。豈に南渡の後に當たって、流風遺韻は、猶お存する者有るか。今子華の歌を聞くに、紆徐宛轉として、古人一唱三歎の旨を得たり。因りて戲れに一闋を塡めてこれを遺る）

こうしてみると、江南においては十五世紀以降も、曲によってはメロディーが傳承されていたと考えられるのだが、本稿ではひとまず十四世紀における詞樂の傳存を確認するにとどめておく。元代において詞と北曲は如何なる關係にあったのか。また、北曲といっても劇套（雜劇）、散套（散曲）、小令（散曲）があるが、これはひとまとめに考えてよいものなのか。さらには、十五世紀以降に詞樂の傳承が絕えた要因は何であったのか。いずれもこれから探るべき課題である。

註

① 『南京師範大學文學院學報』二〇〇二年第二期。

② 萩原氏には、(a)「元代における詞の歌唱について」(『學林』第二〇號、一九九四)および(b)「元代後期の詞牌と詞體」(『學林』第二三號、一九九五)があり、(a)は主として詞序を資料にし、(b)は同調異體の存在を論據とされている。氏は(b)論文でメロディーが存在しなければ異體は生じ得ないとされるが、一概には言えない。たとえば、「歸朝歡」は『詞律』『欽定詞譜』ともに百四字體しか載せないが、明末の曹元方(崇禎十六年進士)には百五字體(『明詞彙刊』所收「淳村詞」)があるように、異體はメロディーの有無にかかわらず作り得るだろう。異體の存在すなわち詞樂の傳承の證左と見なすのには、いささか愼重でありたい。本稿は(a)論文を承ける。

③ 元、至正十四年金伯祥刊本(北京圖書館古籍珍本叢刊所收)に據る。

④ 元、趙汸「邵庵先生虞公行狀」(四庫全書本『東山存稿』卷六)に、「今上皇帝(順帝)入纂大統、被旨赴上都、秋以病謁告、歸田里、元統二年、有旨召還禁林、從使者至、卽疾作不能行而歸」というように、虞集は元統元年(一三三三)に歸鄉したが、翌年再び召された。しかし、都に至るとすぐに病を發して歸鄉している。

⑤ 『道園學古錄』(四部叢刊本)には「題宋人詞後」の詩題はなく、「紹興間」以下が直接詩題となっている。いま『道園類稿』(元人文集珍本叢刊所收)卷十に據って補っておく。

⑥ 「西湖遊幸」の條に次のようにある。

湖上御園、南有聚景、眞珠、南屏、北有集芳、延祥、玉壺、然亦多幸聚景焉、一日、御舟經斷橋、橋旁有小酒肆頗雅潔、中飾素屏風、書風入松一詞於上、光堯(＝高宗)駐目、稱賞久之、宣問何人所作、乃太學生兪國寶醉筆也、其詞云、……上笑曰、此詞甚好、但末句未免儒酸、因爲改定云、明日重扶殘醉、則迴不同矣、卽日命解褐云

⑦ 萩原論文(a)に既出。

⑧ 松雲子は、熊夢祥、字は自得のこと。江西の人であるが、淮浙の間を放浪して、後に江蘇吳縣に住んだ。群書を博覽し、音律に通じていた。顧德輝『草堂雅集』(四庫全書本)卷六「熊夢祥小傳」を參照。なお、顧德輝については後述する。

⑨ 萩原論文(a)に既出。

⑩ 注④を參照。

⑪ その詞牌を列擧しておく。作品が複數ある場合は、下にその數字を付す。

六州歌頭、瑞龍吟、多麗3、蘭陵王、摸魚兒8、金縷詞2、沁園春4、蘇武慢2、風流子2、疏影、望海潮、解連環、春從天上來2、南浦、花心動、綺羅香、眉嫵、喜遷鶯、石州慢2、水龍吟7、憶舊游、齊天樂2、桂枝香、木蘭花慢2、眞珠簾、丹鳳吟、高陽臺、百字令2、玉蝴

蝶、東風第一枝、陌上花、定風波、八聲甘州、聲聲慢2、掃花遊、水調歌頭2、鳳凰臺上憶吹簫、玉漏遲、一枝春、滿江紅2、意難忘、露華、孤鸞、江城梅花引、洞仙歌

因みに小令五十九首についても、三十二種という多くの詞牌が用いられている。

⑫　いま、慢詞の數／全作品數・使用した慢詞詞牌數、を張翥および柳永以下の六人について示すと次のようになる。張翥が詞の專家たちと同樣の傾向を有するのが見て取れるだろう。柳永以下は『全宋詞』に據る。

張翥：　七四／一三三（＝56％）・45種
柳永：　一二一／二一三（＝57％）・85種
周邦彥：　七四／一八四（＝42％）・63種
姜夔：　三七／八四（＝44％）・33種
吳文英：二一〇／三四〇（＝61％）・96種
周密：　八二／一五二（＝54％）・52種
張炎：　一七四／三〇二（＝57％）・60種

なお、慢詞の認定の仕方によってはその數に多少の出入りがあり得るので、ここに擧げた數字は絶對のものではない。

⑬　呂微芬、楊鏞校注、一九九五、浙江古籍出版社。

⑭　一名を瑛、また阿瑛ともいう。字は仲瑛。『明史』文苑傳に傳がある。

⑮　萩原論文(a)に既出。

⑯　宋元筆記叢書本（上海古籍出版社、一九八七）に據る。

⑰　たとえば、倪瓚の「題荆溪清遠圖」（四庫全書本『清閟閣全集』卷九）に、

荆溪吳國良、工製墨、善吹簫、好與賢士大夫遊、張貞居每館寓其家、艤舟籬傍、興盡便返、故國良得貞居翰墨爲多、今年夏、予以事至郡中、泊舟文忠祠後、國良便從溪上具小舟相就語、爲援簫作三五弄、慰予寂寞、幷以新製桐花煙墨爲贈、予嘉其思致近古、遂寫荆溪清遠圖以遺之、實至正十年四月廿一日也、東海倪生記

という。なお、張貞居とは、張雨（一二一八三～一三五〇）のこと。字は伯雨、錢塘の人で、若くして茅山に登り道士となり、句曲外史と號した。多くの文人墨客と交わり、書でも知られた。

⑱　『玉山名勝集』卷四に郯韶（字は九成、號は雲臺散史、湖州の人）の詩が見え、その詩題に「至正十年十二月十九日、義興吳國良持倪雲林詩、來玉山中、相與徜徉數日（至正十年十二月十九日、義興の吳國良は倪雲林の詩を持ちて、玉山中に來り、相與に徜徉すること數日なり）」とある。

⑲　『明史』文苑傳の楊維楨の傳に次のようにいう。

維楨詩名擅一時、號鐵崖體、與永嘉李孝光、茅山張羽（疑當作雨）、錫山倪瓚、崑山顧瑛爲詩文友、碧桃叟釋臻、知歸叟釋現、清容叟釋信爲方外友、張雨稱其古樂府出入少陵二李間、有曠世金石聲

⑳　たとえば、吉川幸次郎『元明詩概說』（岩波書店、中國詩

人選集二集）を參照。

㉑『明史』本傳および明、宋濂「元故奉訓大夫江西等處儒學提舉楊君墓誌銘」（四部叢刊本『宋學士文集』卷十六）を參照。

㉒鄭騫『北曲新譜』（臺北藝文印書館、一九七三）二一二頁を參照。

㉓錢良祐（一二七八～一三四四）の『詞源』後跋によれば、張雨と張炎は交遊があり、張炎には「浪淘沙　作墨水仙寄張伯雨」がある。張雨はある程度詞樂を知っていたであろう。

㉔顧德輝の和した「花游曲」も『鐵崖先生古樂府』に載せられているが、顧德輝『玉山逸稾』卷三（讀畫齋叢書本）にも序とともに收められている。序の內容は楊維楨の序と同樣である。

㉕『可傳集』は袁華の詩集であるが、楊維楨の刪定にかかる。詳しくは『可傳集』卷首の楊維楨の序を參照。

㉖いま王行の「品字令」の本文を引いておく。

飛瓊環珮。在縹緲　香雲影裏。氷絲瑩蹙霞綃帔。瑤階玉砌。雪月看初霽。　不奈妖妍相嫵媚。任天然風致。綽約仙姿眞絕世。衆芳無地。先得春風意。

㉗『中國古典戲曲論著集成』第三冊（中國戲劇出版社、一九八〇（一九五九初版））に據る。

㉘因みに、『道園類稿』本の「葉宋英自度曲譜序」の一部は、これも虞集の作である「中原音韻序」（文集には見えない）の一部と瓜二つである。このことについては別稿「中原音韻序と葉宋英自度曲譜序」に讓る。

㉙『岡村繁教授退官記念論集中國詩人論』（汲古書院、一九八六）所收。

㉚いま、『全宋詞』によって、主だった詞人で三十種類以上の慢詞を塡めている詞人を拾えば、

柳永（85）、晁端禮（31）、晁補之（30）、周邦彥（63）、辛棄疾（32）、姜夔（33）、史達祖（34）、吳文英（96）、劉辰翁（44）、周密（52）、張炎（60）

となる。辛棄疾と劉辰翁は蘇軾の流れを汲む詞人とされ、その他の詞人は詞の專家とされる。辛棄疾と劉辰翁が多くの詞牌を使っているのは意外ではあるが、實は彼らはそれほど多くの曲を自分のものにしていたわけではなさそうである。なぜならば、宋人に最も好まれた、言い換えれば、みなが知っていた慢詞の曲を擧げれば、

水調歌頭、念奴嬌、滿江紅、沁園春、賀新郎、滿庭芳、水龍吟、木蘭花慢、摸魚兒

となろうが、辛棄疾はこの九種だけで慢詞總數二百十九首中一五四首（70％）、劉辰翁は百六十三首中一〇九首（67％）を作っているからである。宋代においても、多くの曲を自在に扱えた詞人はきわめて少なかったと思う。

㉛四庫全書存目叢書所收明天順八年刻本に據る。

㉜『百家詞』すなわち『唐宋名賢百家詞』は、明、正統六年

（一四四一）に成ったという。天津圖書館藏明紅絲欄鈔本『百家詞』（天津古籍出版社、一九八九）の唐圭璋氏の序を參照されたい。なお、吳訥の生卒年は唐序に從った。

（付記） 本稿の內容は、第五十九回大阪市立大學中國學會（二〇〇六年一二月九日）における「元明における詞樂の傳承をめぐって」と題する發表を發展させたものである。當日、意見をお寄せ下さった方々に感謝したい。また、資料の搜求に當たっては種々の索引類（電子索引を含む）を利用したが、なかでも王德毅等編『元人傳記資料索引』には多大の恩惠を被った。特に記しておく。なお、本稿は平成十九年度佛教大學教育職員研修の成果の一部である。

（又記） 本稿脫稿後、楊棟『中國散曲學史研究』（高等教育出版社、一九九八）が、元代では詞と曲が並行していたとするのを知った。しかし、「這有芝菴《唱論》、夏庭芝《青樓集》以及大量元人詞作的序跋爲證」（三七頁）というのみで、具體的な論證はない。